

# 渡辺喜恵子

わたなべきえこ

今年、北秋田市出身で小説「馬淵川」<sup>まべちがわ</sup>「啄木の妻」などの作品で知られる直木賞作家、故・渡辺喜恵子さんの十三回忌にあたりります。10月には、渡辺さんを偲ぶ朗読会などが開催されたほか、市文化会館では、人と作品を紹介する特別展なども開かれています。

渡辺さんの著書は、刊行から時間がたちほとんどが絶版となっているため図書館などでしか読むことができなくなりましたが、今でも多くの人々に愛読されています。その人と作品についてご紹介します。

## 文学賞の最高賞を受賞

渡辺さんが小説「馬淵川」で、芥川賞とならび文学界の最高賞の一つとされる直木賞(第41回)を受賞したのは昭和34年。秋田県人として初受賞、また、現在の直木賞の選考委員でもある平岩弓枝とともに女性二人が同時受賞したことから、当時大きな話題になりました。

作品は、旧南部藩の一商家に生きた女四代の生涯を馬淵川の流れになぞらえて描いた大河小説。戦時中、母のふるさとである岩手県二戸郡石切所村(後の福岡町、現二戸市)に疎開していた頃、すでに草稿を



平成元年頃の渡辺喜恵子さん(東京・本駒込の自宅で)

書き上げていました。一部は昭和22年に発表されましたが、全編を発表したのは同30年、また、単行本化されたのは筆を執ってから15年後の同34年4月のことでした。

選考委員の一人、海音寺潮五郎は、「男女多数の人物をそれぞれに個性を持たせて書きわけている点、才能の富贍<sup>ふとく</sup>が十分にうかがわれた。この人の本質は詩人ではないだろうか。全篇にみぎる詩情がまことに楽しかった」と評しています。

## ■生い立ち

渡辺さんは大正3年、秋田県仙北郡檜木内村(現仙北市)で父栗生澤米太郎、母ハツの次女として生まれました。父は岩手県和賀郡十二鎗村(現花巻市東和町)出身の木材商人でした。商売のため秋田の鹿角、二ツ井、生保内、檜木内などに移り住みましたが、大正5年、渡辺さんが2歳のとき、郡役所や国鉄の駅があり、木材の集散地でもあった鷹巣に落ち着きます。

ここで、後の丸米木材榭となる製材工場を創業、会社の経営は関東大震災後の木材需要もあって順調に軌道に乗り、渡辺さんも使用人が何人もいる大きな家で育ちました。



直木賞受賞作「馬淵川」

家の隣接地(現市文化会館敷地)には広い原っぱや水連の咲く沼があり、少女時代は四季を通じ友人たちと一日中遊んでいたそうです。

## 能代高女時代



この頃の思い出が、小説「みちのく子供風土記」に描かれています。鷹巣尋常小学校3年生のとき、父が釧路の友人から酒席で渡辺さんを養女にほ

しいという懇願を受けてしまったため、一時期、釧路で生活したことがあります。しかし、母方の祖父が激怒したため母に連れ戻された、というエピソードがあります。

このときは釧路の生活になじみ、アイヌの友人もできたそうです。後年、友人には霧に包まれた釧路のまちの魅力を語っています。昭和43年には、幕末に鳥取から釧路に渡った家族の波乱に満ちた人生を描いた「原生花園」を秋田魁新聞に連載していますが、釧路での体験が創作の原点になったのかもしれない。

## ■多感な女学生時代

小学校卒業後、旧制県立能代高等女学校(現在の能代北高)に入学します。夏は汽車通学、冬は寮に入るという生活でした。同校は当時、良妻賢母育成を使命とした厳格な校風でしたが、汽車では男子と会話したり、禁じられていた菊池寛の恋愛小説を読みふけてしかられたり、奔放な女学生だったようです。

文学に関心を寄せ、読書に没頭したのもこの頃。火の気のない寮で、「嵐が丘」や「風と共に去りぬ」など翻訳小説や長編を読みあさりました。当時の校長は、

## 渡辺喜恵子年譜

- 一九二二(大正二)十一月六日、秋田県仙北郡檜木内村下檜木内に、父栗生澤米太郎、母ハツの次女として生まれる。
- 一九二六(大正五)父が鷹巣町北塚ノ岱(現材木町)に製材工場を創業し転居。
- 一九二〇(大正九)鷹巣尋常小学校に入学。
- 一九二二(大正十一)八歳。四月、北海道釧路市茂尻矢町の二木貞吉に望まれて養女となつたが、十二月鷹巣に帰る。
- 一九二七(昭和二)秋田県立能代高等女学校に入学。冬は寮生活を送る。小説を読みあさる。
- 一九三一(昭和六)三月、同校卒業。上京して叔父宅に寄宿し、花嫁修業を行う。
- 一九三三(昭和八)十九歳。画学生渡辺茂と婚約。
- 一九三五(昭和十)結婚のため広島へ行く。
- 一九三六(昭和十一)夫胸を病み入院。その後夫婦は療養のため四国へ転地。
- 一九三八(昭和十三)父米太郎死去。上京。
- 一九三九(昭和十四)正月、夫死去。
- 一九四一(昭和十六)友人とタイプ印刷の事務所を持つ。仕事のかたわら同人誌をつくる。
- 一九四二(昭和十七)処女作、短編集「いのちのあとさき」を国文社より出版。同人誌「芸芸主潮」に入会。
- 一九四四(昭和十九)三十歳。三月、母の故郷岩手の福岡へ疎開。「馬淵川」の執筆にかかる。
- 一九四五(昭和二十)疎開するとき用意した三千枚の原稿用紙をほとんど使い切った頃終戦。九月上京。
- 一九四七(昭和二二)『明日』に「末の松山(馬淵川の一部)」を発表。
- 一九四九(昭和二四)『三田文学』に入る。暮、木下利秀と再婚。
- 一九五〇(昭和二五)紙が出回りはじめて出版社が増える。『明日』『女性改造』『新女苑』などに執筆。同人誌『下界』同人となる。
- 一九五四(昭和二九)母ハツ死去。
- 一九五五(昭和三十)『新文明』に「馬淵川」を三回にわたって発表。
- 一九五九(昭和三四)四五歳。四月、「馬淵川」刊行。七月、同作品により第四十一回直木賞を受賞。
- 一九六〇(昭和三五)「地蔵流し」「白と紫」出版。「馬淵川」フジTVでドラマ化。
- 一九六二(昭和三七)「白と紫」フジTVでドラマ化。
- 一九六三(昭和三八)「京おとこー大谷竹次郎物語」刊行。
- 一九六四(昭和三九)五十歳。「饑渴つ子」発行。改題の「南部女人抄」がNHK仙台で放送。
- 一九六七(昭和四二)『艶い血』刊行。
- 一九六八(昭和四三)秋田魁新聞に「原生花園」を連載開始(完結は昭和四四年)。
- 一九六九(昭和四四)「みちのく子供風土記」、